「鉄山の歩み」（抜粋）　奥泉勝雄

奥村鉱業所から針田鉱業所への移譲と鉄山の盛衰

常呂町高齢者教室「昭和63年度　オホーツク大学文集　トーコロ」掲載

（略）昭和20年８月15日に戦争が終戦となり、常呂鉱山は終戦と同時に鉱山業務一切をストップしたのです。ストップした内容はよく分かりませんが、後は休山ということになり、従業者は別の炭鉱または土建業へと鉄山からは出て行きました。

なお、奥村鉱山は休山となったが、別の炭鉱業者が終戦の４～５年前から日吉へ来て、日吉川東の国有林を探鉱し、細々と採掘していたということです。この方は小樽市で農産物の雑穀商を営んでおり、鉱山かぶれの方と聞いておりますが、お名前は針田喜市という方でした。針田氏は小樽の商業を兼ね、細々と鉱山の方を掘り続けており、一方、奥村氏は約１年ほど休山していたので、その間に針田氏と売買の相談をされていたのではないかと思います。後に話を聞いたのですが、私どもの想像通り、奥村氏は針田氏に売買することになり、奥村氏の鉱山、また建物も一切の権利を針田氏に譲渡する契約を締結したということです。

注：昭和19年３月　常呂鉱山の鉱業権を針田喜一が譲りうけ、国力鉱山と命名し採掘を開始（常呂町史　針田鉱業概況書）　＊奥泉さんの記憶違いがあります

昭和25年２月　国力鉄山株式会社創立（本社　常呂郡端野村忠志）

昭和26年６月　針田鉱業株式会社に商号変更（本社　札幌に移転）

昭和29年７月　常呂郡常呂町字日吉に国力支店設置

それから後、針田氏は奥村氏以上に鉱山内容を拡大して、人夫も奥村氏以上に入れ、社宅、また飯場なども増築して針田鉱業所と称していました。

針田鉱業所は露天掘りではなく、全面坑道掘りで進み、採掘も順調に進んでいたようです。

搬出については軌道は使わず、トラックで運搬する計画を立て、土場は共立駅（注：共立駅までの湧網線開通は昭和27年12月６日）の裏に作り、共立から国鉄貨物に積み込み、奥村氏同様に室蘭輪西製鉄所へ輸送したのです。なお、軌道線は皆撤収したとのことでした。

＊注：『常呂町百年史』には、「国力鉱山の場合、一番の問題は輸送の面であったが、27年12月６日に湧網線の常呂・下佐呂間間が開通し、共立駅が設置され、この問題はいっきょに解決される。（略）湧網線の全通の結果、増産体制が整い、採掘量も増大していくようになる」と記載。

鉄鉱石の良質の鉱石は室蘭から船積みにして八幡製鉄所にも送ったと聞いております。なお冬期間は吹雪もあります。その時は、トラックでの搬出も不可能なので農家に頼み、

馬そりを何十台も出して、馬で鉱石を運んだものでした。農家の方も冬仕事として良い仕事であり、助かったと言っていました。

私は地元でありますが、馬で木材業の方で働いていたのです。針田鉱業所が４～５年を過ぎた頃、鉄鉱石の値が高騰したのです。その時に奥村氏は（当時、私の裏の沢の国有林に大きな鉱脈があったと思いますが道がなく、また道を造るにも経費が相当かかるのです）山林に何千トンも貯鉱して置いており，その鉱石を私ら３人ほどで馬搬することを請け負ってトラックに積み込み、できるところまで全部出しました。その時は大変に良い金になりました。（略）

＊注：針田鉱業所を含む日吉の一部と福山地区に送電開始　昭和29年６月27日
　日吉・登・吉野地区通電　昭和29年７月７日
　日吉電通式・祝賀会　昭和29年７月21日
＊注：電力は北海道電力株式会社豊川変電所から日吉に至る幹線中、国力鉱業所事務所付近から自家受電（220キロワット）で鉱山受電室（300キロワット）に導入し、各所に配電。

鉄山では電気が入ったので電工専門の方を雇い入れ、まず事務所近くに変電所を造り、各現場に電気を送電した。入電前は全部手堀であったが、電気が入ってからは各現場ごとに電気削岩機を買い入れ、採掘の方も以前より何倍も増産されるようになりました。（略）

しかし、35年頃より輸入鉄鉱石が入ってくるようになり、針田鉱業所の鉄鉱が不況に落ち込むようになっていった。この輸入鉄鉱石は値が安く、歩留まり率も割合に良いというのです。針田鉱業で出している鉄鉱石も良質ではあるが、日本は労賃が高いので、安い輸入鉄鉱石と太刀打ちできず、遂に昭和39年９月末で針田鉱業所も閉山となったのです。閉山となってからは火が消えたようで全く寂しかったものです。

針田鉱業が盛んであった頃は、山神楽の時などは他町村から田舎力士が大勢集まって宮相撲をとりに来たのです。また、夜は花火大会などで毎年のように大変にぎやかにして見せてくれたものです。（略）